

平成23年 3月31日現在

機関番号：14101  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2009～2010  
 課題番号：21720304  
 研究課題名（和文） 地域史を活用したオルタナティブな「多文化共生」像の構築に向けた  
 試行研究  
 研究課題名（英文） Toward an alternative ‘multicultural co-existence’ in Japan:  
 an action research for community organization by use of local history  
 研究代表者  
 福本 拓 (FUKUMOTO TAKU)  
 三重大学・人文学部・非常勤研究員  
 研究者番号：50456810

研究成果の概要（和文）：日本人・在日住民双方の関係性の蓄積（＝地域史）を広く住民に知っ  
 てもらおう活動に取り組んだ。具体的には、住民座談会や区主催のフォーラムにて社会地図の展  
 示・発表を行ったほか、NPO 関係者とパンフレット『ともに生きるまち 生野』を協同で作  
 成し、住民に配布した。その一方で、在日住民の社会包摂に関わってきた市民運動資料の整理  
 にも取り組み、データベース公開を視野に入れたシステム開発・データ入力を進めた。そのほ  
 か、高校での地域史の展示に空中写真を提供したほか、それを活用した地域学習教材の提供に  
 も関わった。

研究成果の概要（英文）：As the first phase of my research, I have given the local residents in  
 Ikuno ward, Osaka City, historical knowledge of the relationship between Japanese and  
 Koreans there. The author has adopted two methods for this: first, I distributed the  
 pamphlets, ‘co-existence town Ikuno’, to local citizens under the mutual cooperation  
 between the author and several NPO staffs in the area; second, I made presentations of  
 social and historical maps of Ikuno ward at the meetings of local people and the forums  
 held by the ward office. Moreover, I found the material on grass-roots social movements for  
 the support of ethnic minorities which is useful for the second phase of the research. In this  
 year, the author has organized the material for the purpose of the establishment of  
 database. With respect to the exhibition of the local history of Ikuno ward, I offered a series  
 of aerial photographs that described the transition of the spatial form of the  
 Korean-concentrated area. In addition, these photographs are also used for the educational  
 material in the local high school.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：都市社会地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：多文化共生, 在日朝鮮人, 集住地区, 地域史, アクションリサーチ

## 1. 研究開始当初の背景

(1)日本では、近年「多文化共生」をキーワードとする、エスニック集団の社会的包摂を目指したまちづくりの機運が高まってきている。エスニック集団の生活状況等に関する調査・研究に加えて、研究者が実際に地域で「多文化共生」の担い手として活動しているケースも増加している。だが、研究者による積極的な参画が進む一方で、これまでの取り組みがエスニック文化の表面的な称揚にとどまることが多く、表面的な多元主義に陥る危険性をはらんでいる。

(2)地域での多文化共生の実践には、移民受け入れの「主役」となる地域住民の態度変容が不可欠である。これまでは、研究者の視点はエスニック集団の内部にばかり向けられ、地域住民に対する関心が乏しかった。また、既存の実践志向の研究では、「地域」というキーワードが繰り返し言及されてきたものの、その具体像や役割が明確化されることはなかったことも指摘できる。

## 2. 研究の目的

(1)これまでの「多文化共生」に関する取り組みの問題点は、「共生」に果たす「地域」の果たす役割を明確化できなかったところにある。本研究では、「地域」を既存住民とエスニック集団住民による問題共有のための基礎的枠組み・空間的スケールと捉え、「地域」をベースに、理念先行のトップダウン型ではなく、ボトムアップ的な「多文化共生」像の構築を目指す。

(2)上述(1)に関連して、新たな「多文化共生」像を形作っていく上で、どのような方法が最も有効であるかを模索・検証することも本稿の主目的の一つである。具体的には、「地域」に蓄積されてきた住民相互の関係の相対(=「地域史」)を「見える化」することにより、住民の相互理解にどのようなプラスの効果をもたらされるかを把握する。

## 3. 研究の方法

### (1)社会地図等のコンテンツ作成と展示

概して、既存住民とエスニック住民の生活世界は分断されたものとして捉えられがちである。既存住民には、自分たちの地域に「どれだけたくさんのエスニック住民が居住しているか」すら知られていないことが多い。

「地域」の姿を既存統計や資料を用いて「見える化」し、住民に展示してその反応を記録することが研究方法の中心である。その際、地図を積極的に活用するところに本研究の特色がある。

### (2)住民の反応の評価

住民相互による生活世界の重なり合いの実感や、「多文化共生」のまちづくりの機運に対し、どのような展示・伝達方法がより効果的に寄与しうるかを測定する。具体的には、住民に対してアンケート調査を実施するほか、展示の前後でどのような考え方の変化が起こったかに関する質的調査を行う。

## 4. 研究成果

### (1)社会地図の展示



主に、生野区地域福祉アクションプランを拠点に、生野区役所・社会福祉協議会・町会関係者・福祉NPO関係者と協働で、在日住民の現状を広く知ってもらおう住民座談会を開催してきた。その際、社会地図をポスターに印刷したものを掲示し、「地域」に対する「気づき」を喚起する取り組みを行った。地域住民からは、驚きをもって評価されるケースも多々あり、本研究の第一段階としては一定の成果を得たといえる(上の写真)。

### (2)啓発パンフレットの作成・配布

生野区地域福祉アクションプランでは、住民座談会(主に町会関係者)のみならず、広く一般住民に在日住民の福祉課題を伝えるパンフレットの作成・配布も行った(1万部)。その際、下図に示すように、地域史を社会地図と重ね合わせた地図(「生野区多文化マップ」)を作成・掲載した。



(3)なお、(1)での社会地図作成の延長として、小地域統計を用いてGISによる集住地区の定量的分析を行った論文が『地理学評論』誌に掲載された（〔雑誌論文〕の④）。その内容は以下のようにまとめられる。

東京および大阪は在日外国人が多数居住する大都市である。彼らは、第二次世界大戦前の植民地出身の移民とその子孫から構成される「オールドカマー」と、1980年代以降に来日した「ニューカマー」とに大別しうる。当該研究では、小地域統計（1995年、2000年および2005年）を用いて両都市における在日外国人のセグリゲーションの計測・図化に加え、「オールドカマー」「ニューカマー」の違いに焦点を当てた分析を行った。セグリゲーションは、general spatial segregation index (GD)によって計測する。加えて、ローカル・モラン分析とオッズ比を用いて彼らの集住地区を特定する。分析の結果は以下のように要約できる。

「ニューカマー」の比率が「オールドカマー」を大きく上回る東京では、集住地区数は減少したものの、GD指標の値は一貫した傾向を示していない。この傾向は、部分的には、新宿区・豊島区・港区・荒川区の特定の集住地区における外国人数の増加に起因している。一方、「オールドカマー」の比率が50%を超える大阪では、セグリゲーションの程度は低下傾向にある。生野区の一部を除き、既存の集住地区のほとんどで外国人数は減少している。しかし、中央区で新たに形成された集住地区では外国人人口の増加が確認できる。

これら二都市の比較から、大阪のGD指標は東京よりかなり高いことがわかった。このことは、大阪において「オールドカマー」（そのほとんどが在日朝鮮人）の集住地区が空間的により大きいことに由来している。ただし、大阪では既存の集住地区における「オールドカマー」の社会減により、GD指標は大きく低

下している。一方、両都市は、「ニューカマー」（とりわけ新規入国の外国人）が特定の地区における外国人の増加に結び付いているという点では共通している。この結果は、そうした地区において「ニューカマー」が入居しやすい民間賃貸住宅の比率が高いという特徴を有する。

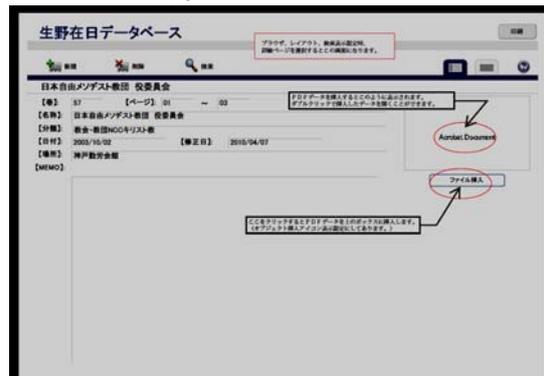
東京と大阪の比較から、「オールドカマー」「ニューカマー」がそれぞれ、セグリゲーションや集住地区の分布傾向に影響を与えていることが明らかとなった。とりわけ、新規入国の「ニューカマー」の存在は、日本の都市特有のセグリゲーションに関する特徴の一つといえる。この点に関していえば、外国人の長期滞在を想定していない日本の出入国管理政策の影響が一定程度あることを明らかにできた。

#### (4) 市民運動データベースの作成

地域住民からの資料提供については、当初予定通りに進捗することはできなかった。しかし、生野区・東大阪市にて市民活動を展開してきた団体より、過去の資料の提供を受けた。その中で特に資料的価値が高いのは、同地域での「密航者」に関する支援活動の資料である。

これまでの研究で看過されてきた生野区における在日住民の特徴として、戦後の「密航者」の占める割合が予想以上に高いことがある。彼らをめぐる排除の実相や支援の実態を「見える化」することは、地域で潜在的に育まれてきた「多文化共生」のための土壌を住民に認識してもらえる点で、非常に意義の大きいものと考えられる。

研究期間の2年間で、提供された資料（簿冊1,000冊あまり）のデータベース化に取り組んだ（下図）。



この資料に含まれる「密航者」個人のプロフィールに関するデータを整理した結果、在日住民のみならず、「密航者」支援に地域住民がさまざまな形で関与してきたことがわかった。換言すれば、「密航」の露見を契機に、既存住民・在日住民の関係性が湧出したケースと位置づけられる。この成果は、〔学

会発表]の①②にて報告し、[雑誌論文]の①として掲載決定している。

(5)地域史の教材としての活用

地域史を地図によって呈示する一環として、空中写真を用いて集住地区の空間形態の歴史的変遷を示す試みを行った。大阪市生野区にある桃谷高校の依頼を受け、シンポジウム「写真と文化でつなぐ『共生』の街・猪飼野からの発信」にパネリストとして参加した際(2009年8月30日)、この空中写真を展示し、来場者の多くから興味を示してもらった。

その後、平成22年度には、同高校の教員のサポートも得て、同校での韓国朝鮮語演習での授業「済州島と生野区の在日韓国朝鮮人」に上記の資料が活用されるに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①福本 拓, 「密航」に見る在日朝鮮人のポスト植民地性, 『アジア遊学』, 査読無, 掲載決定

②福本 拓, 東京・大阪の集住地, 石川義孝編『地図で見る日本の外国人』ナカニシヤ出版, 査読無, 2011, pp. 48-49

③藤永 壯・高 正子・伊地知紀子・鄭 雅英・皇甫佳英・高村竜平・村上尚子・福本 拓・高 誠晩, 解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(8・下): 金春海さんへのインタビュー記録, 大阪産業大学論集(人文・社会科学編), 査読無, 9巻, 2010, pp.143-158

④福本 拓, 東京および大阪における在日外国人の空間的セグリゲーションの変化—「オールドカマー」と「ニューカマー」間の差異に着目して—, 『地理学評論』, 査読有, 83巻3号, 2010, pp. 288-313

⑤藤永 壯・高 正子・伊地知紀子・鄭 雅英・皇甫佳英・高村竜平・村上尚子・福本 拓・高 誠晩, 解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(8・上): 金春海さんへのインタビュー記録, 大阪産業大学論集(人文・社会科学編), 査読無, 8巻, 2010, pp.69-88

⑥ T. FUKUMOTO, Satoshi YAMAGUCHI, *Shukkyosya tachi no toshi kukan* (Spaces of urban migration) (書評), *Geographical Review of Japan*, 査読無, No. 81 vol. 2, 2009, pp. 98-100.

[http://www.jstage.jst.go.jp/article/geogrevjapanb/81/1/98/\\_pdf/-char/ja/](http://www.jstage.jst.go.jp/article/geogrevjapanb/81/1/98/_pdf/-char/ja/)

[学会発表] (計2件)

①福本 拓, 「密航」がつなぐもの—戦後大阪在日朝鮮人史の一側面, シンポジウム『2010年, いま, 引き揚げを問う』, 2010年9月18日, 於: 九州大学

②福本 拓, 日朝間の「密航」をめぐる経験—排除の客体か, 変革の主体か?, シンポジウム『日本帝国崩壊と人口移動・引揚げ, 送還そして残留』, 2009年8月23日, 於: 北海道開拓記念館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福本 拓 (FUKUMOTO TAKU)

三重大学・人文学部・非常勤研究員

研究者番号: 50456810